

# 日本人学生と留学生がともに英語で学ぶ 地域遺産教育プログラム 『やまぐちスタディーズ』の開発

岩野 雅子

山口県立大学

安溪 遊地

山口県立大学

[キーワード]

公立大学の使命、英語による授業、地域と共に創る、  
教育の質向上

## 1. 『やまぐちスタディーズ』とは

公立大学は、地方自治体による創立の背景やその運営形態等にもとづき、長い間、おのずと地域貢献型大学としての機能を担ってきた。それぞれが拠って立つ地域社会の特性や変化によって地域貢献の形を模索し、特色づくりに努めている。山口県立大学は、「人間性の尊重」「生活者の視点の重視」「国際化の推進」「地域社会との共生」という4つの理念を掲げ、健康福祉と地域文化の進展に資する領域で個性を発揮する方針を立てている。本稿で紹介する『やまぐちスタディーズ』は、こういった本学の基本理念を具現化し、強みを可視化する目的で取り組んだプロジェクトの一つであり、平成23年度に実施した認証評価において、「長所として特記すべき事項（教育方法）」として取り上げられた。評価結果報告書には、「2009（平成21）年度から、山口の歴史や文化、地域性に密着したテーマについて英語で学習する地域遺産教育プログラム『やまぐちスタディーズ』を開講している。このプログラムでは、伝統芸能の鑑賞、伝統工芸の体験、萩の城下町の探索など『LOL』（Learn on Location, 現地学習）の概念を取り入れながら、当該授業を受講している日本人学生と留学生がそれぞれのテーマについ

て議論することによって、学生の語学や文化理解に対する興味・関心を高めていることは評価できる」とある<sup>1</sup>。

『やまぐちスタディーズ』の開発は、平成20年度に採択された文部科学省『大学教育の国際化加速プログラム（海外先進教育研究実践支援（教育実践型）』を機に、それまで開講してきた英語で行う授業科目の中から、山口の地域資源や歴史文化遺産等を学ぶ4科目を選び、教育内容や方法の面から質改善を図る目的で検討を始めた取り組みである<sup>2</sup>。その中心をなすのは、現地で学ぶLOLという教育方法であり、フィールド学習の事前事後のプロセスを充実させて、日本人学生と留学生との間にある学びのスタイルの違いを混ぜ合いながら、山口を素材に地域社会を見る「目」を養うことを目的としている。その先にあるのは、グローバルな視点から地域社会の遺産（Heritage）を捉え、見えるもの・見えないものの価値を未来へ繋いでいく態度を身につけることである。地元で、あるいは国内外の地域社会で、自らが生きていく足元をなす物的・人的遺産や自然等を大切にすることをもち、職業人あるいは社会人としての役割の中で地域活性化の道を探ることのできる若者の育成を目標としている。

認証評価において「長所」という指摘を受けたのを機に、翌年度から（平成24年～26年度）、学内の研究創作助成を得てさらに内容を充実させた。『やまぐちスタディーズ』を構成する4科目は、「History of Yamaguchi」（郷土文学遺産、担当教員4名）、

「Yamaguchi and the World」(世界交流遺産、担当教員3名)、「Arts and Culture in Yamaguchi」(郷土文化遺産、担当教員3名)、「Crafts and Design in Yamaguchi」(クラフト&デザイン遺産、担当教員5名)である。数多くの教員が関わり、教材となるテキストを作成し、日本人学生と留学生の教育に当たってきた。

## 2. 地域遺産教育プログラム開発のスタート

地域遺産教育プログラムの開発に至る背景としては、次の5つの課題があった。

- ①留学生を主たる対象とし、日本人学生とともに学ぶ機会を提供するために英語で開講する科目を用意し、授業改善等のFDも行っていたが、双方のレベルや目的の違いをふまえつつ、お互いが満足する内容・方法・評価への改善が必要であった。
- ②専門科目を英語で学ぶ意味が明確でなく、日本人学生の履修者が少なかったため、英語で学び発信する力を身につけるためのより積極的な動機づけが必要であった。
- ③地域の観光資源や文化資源等が英語で発信されておらず、「知りたい」「知らせたい」という地域住民や学生の気持ちがあるにもかかわらず、英語でアクセスできる素材が不足していた。
- ④教員自身も知らない地域素材が多くあり、地域住民や専門家から協力を得る必要があった。
- ⑤学士課程構築、チームティーチング、主体的な学び、ICT活用教育といったさまざまな教育改革の流れや、大学の国際化や個性化といった議論も見据えつつ、特色ある教育内容を打ち出し、学生に提供する必要性を感じていた。

『やまぐちスタディーズ』をなす4科目は国際文化学部の教員が担当しており、英語で開講する科目を履修するのは主として国際文化学部生と当該学部への留学生・交換留学生であった。そこで、国際文化学部教員と、全学の国際化を推進する部署(国際化推進室)とが連携し、テーマを「英語で開講する科目の改善」「地域遺産教育」「LOL(Learn on Location)手法の導入」の3つに絞り、平成20年度の文部科学省補助事

業に応募し採択された。

平成20年度に行った海外先進事例視察では、次のような知見を得た。

- ・大学周辺の地域遺産を積極的に取り上げてウォーキングツアーやバスツアー等で巡るコースや、遠隔地や海外などに出かけるスタディツアーなどを考えること。学外での活動は、「learn on location/site」「fieldwork」「trip」「experiential learning」などと呼ばれる。
- ・講義等で事前学習や事前調査を十分に行った上で、フィールドに出かけて学び、学んだことを他者に伝える発表(word out, speak out)をして、「学びを消化させる」授業マネジメントを考えること。
- ・現地で地域の人々を講師として学ぶこと。
- ・郷土文学、郷土の生んだ人物、歴史的遺跡や建造物、歴史的イベント、地域のクラフトやデザイン等の歴史文化遺産から、貧困やホームレスなどの社会的課題、コミュニティ開発、多様な宗教、工場群や工業遺産にいたるまで、取り上げるテーマや専門分野は何でも可能である。

授業方法としては、次のような助言を得た。

- ・事前学習を確実に行わせるため、学生が読むべき資料(リーディング・バック)をまとめて渡し、読んだことを確認する課題を出す。
- ・グループ学習等で役割を担わない学生が出ないよう、個人学習を組み合わせるグループ学習となるような工夫をし、個々の学生の行動を評価する。例えば、必ず個人学習結果を持ってこさせ、それらをグループ内で比較検討して一つにまとめあげる作業をし、個人学習結果も提出させるなど。
- ・地域遺産を学ぶことが、自分の何と結びつくのかを現場で考えさせ、記録させ、疑問点や質問を集めて、クラス全体でいくつかの質問にまとめて、最後に各人に伝えさせる。

科目の成績評価としては、次のようなものが用いられていた。

- ・理論的な説明ができること(レポート等)。
- ・フィールドワークの記録をもとにした事実に対す

る主観的なレスポンスができること（ジャーナル等）。

- ・リーディングパックに関する理解ができること（確認テスト等）。
- ・グループやクラスなどでの討論、質問出し等をふまえた上で、自らの学びをいかに活かすかについて説得力をもってまとめることができること（最終レポート等）。
- ・学んだことについて他者に伝えられること（作品展示、発表、写真や動画作成等）。

「アカデミックな知識」+「アカデミックな経験」=「アカデミックなアウトカム」となるよう授業プランを立てるべきというアドバイスを受けた。そこで、『やまぐちスタディーズ』では、「アカデミックな知識と体験を山口で得た」という実感がもて、日本人学生も留学生もそこで得た「アカデミックな成果」を他地域や他領域の事例に応用できる態度と自信をつけることを目指すこととした。

### 3. プログラムの内容

上記で述べた平成20年度の海外先進事例視察に先立ち、平成19年度には国際化加速事業への申請を前提に、4科目中の1科目となる「郷土文学遺産」について授業改善の取り組みを行っている<sup>3</sup>。海外先進事例視察後には、これにもう1科目「クラフト&デザイン遺産」を加え、上記で述べた知見や助言等をもとに授業改善に取り組んだ。「郷土文学遺産」では、不足する講義資料は事前に英語訳を用意し、地域の講師や研究者（佐々木幹朗氏、多田美千代氏等）による講義を聞くだけでなく、各学生が事前学習で準備した質問を全体討論までもっていく展開とした。また、調べたことをもとに、複数回に分けてきめ細かく地元を歩いて回った。取り上げた地元出身の詩人（中原中也）や文学者（嘉村礒多）が生きた時代（明治末から大正、昭和初期）の足跡をたどることで、日本社会や、そこで生きた人々の価値観や人生観、世界観などについて考え、それから約80年を経た現在、同じ地で今を生きる自分にも目を向けるよう促した。ジャーナルを記録させ、レポートや口頭発表を取り入れた。最終発表の一

つは、「礒多をしのぶ会」において出席者と学生との間の作品朗読会として実現し、日本語や英語による朗読のほか、作品解釈に関するディスカッション、学びの成果報告などを行った。一方、「クラフト&デザイン遺産」では、萩の竹、萩焼、山口のデニムなどを取り上げた。地域の専門家や芸術家、起業家等による講義を経て、工場や工房の見学等を行い、取り上げたテーマについて英語で発表する。作品による発表でもよく、デニムを使った地元のファッションショーへのデザイン画を作成した学生もいた。デザインを専門としない学生が、商店街や美術館で開催したショーにおいて準大賞を受賞する例も出た。

平成24年度からは、さらに2科目の教育改善に取り組んだ。「世界交流遺産」では、幕末の密航留学生（長州ファイブ）や山口からの日系ハワイ移民、戦時下の回天基地や、世界のさまざまな言語に翻訳され紹介されている童謡詩人（金子みすゞ）を取り上げている。また、「郷土文化遺産」では、山口県各地の観光地や伝統行事を今までとは異なるグローバルな視点でとらえ直す街歩きの実施を中心に授業が組まれた。また、これらの科目において学生に読ませる論文や資料を電子書籍化し、海外の姉妹大学でも紹介してもらうことで、日本文化や山口県、本学に興味をもった学生が、交換留学生として本学を希望してくれる数を増やすことも目指した。というのも、海外の姉妹大学には日本のいくつかの大学と提携している機関もあり、本学から交換留学生を派遣するためには、相手大学から本学を選んで来てもらう数を増やす必要があった。『やまぐちスタディーズ』はそういった学生が積極的に受講してくれたほか、英語圏からだけでなく、中国や韓国の大学からも英語の得意な学生が受講し、結果的には8つの提携大学との間で実質的な相互派遣者数が確保できている。

筆者の一人である岩野が担当する「Yamaguchi and the World」は、平成28年度は受講者約40名、平成29年度は約50名となっている。交換留学生の数は限られており、日本人学生の履修の方が多い状況にあるが、少数の留学生が混じっていることで、英語で学び発信することに対して自然な雰囲気と緊張感をもって授業

を進行することができている。『やまぐちスタディーズ』を構成する4科目は、英語で開講されている24科目（平成28年度）の一部であるが、約10年間にわたる持続的な教育改善の取り組みを続けた事例でもある。

#### 4. 今後の発展の方向性

『やまぐちスタディーズ』の成果の一つは電子書籍『Yamaguchi Studies: Your door to understating the Culture of Japan』で読むことができる<sup>4</sup>。「自ら教える教材を、自らの手で作成する」という取り組みは、学部の基本的教育方針ともなった<sup>5</sup>。LOL (Learn on Location) に関する詳細な教育方法については海外先進大学に学んだものであるが、「地域が先生、地元が先生」という概念は、本学が採択された文部科学省現代GP「やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開」（平成19年度～21年度）のなかに原型がある<sup>6</sup>。本学独自の強みの上に、国際的でグローバルな視点からの教育改革に向けて取り組んだことが、次につながっていく。

『やまぐちスタディーズ』構築への挑戦は、平成24年度に採択された文部科学省『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援』事業の中で、日本と世界の地域を結んで類似する地域課題の解決に向けた提案をし、世界での学びを地域に還元して地域活性化に向けた行動を起こせるインターローカル人材育成プログラムにおいて、アクティブラーニングを取り入れた『域学共創学習プログラム』に活かされた<sup>7</sup>。また、4つの科目は、英語名で新カリキュラムのなかに位置づけられている。やまぐちの地域文化遺産を学ぶという方向性については、平成25年度に採択された『COC地（知）の拠点づくり事業』において、履修証明プログラム『やまぐち学マイスター』や『やまぐち学研究』としてそのレガシーが継承されている。

地域に根差した公立大学として、地域遺産教育をさらに発展させ、実践的成果や具体的な影響を地域社会にアウトプットしていけるよう、教育研究活動と地域

貢献を連動させ、一体化させることを、公立大学法人山口県立大学の次の目標として考えている。大学と地域が連携して地域の未来を共に切り拓き、創り出すことが、全学の目標である。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 大学基準協会 山口県立大学の『認証評価結果報告書（平成23年度）』公立大学法人山口県立大学ウェブサイトで公開中 p.511  
<http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/contents/000007459.pdf>
- <sup>2</sup> 山口県立大学 『英語で世界に発信する地域遺産教育の開発——LOLを取り入れた『やまぐち地域遺産スタディーズ』の構築を目指して』報告書（平成21年）
- <sup>3</sup> 岩野雅子、シャルコフ・ロバート、加藤禎行 「『やまぐちスタディーズ』構築に向けた試み——2007年度における教育実践』『山口県立大学学術情報』創刊号 平成20年 pp.126-133
- <sup>4</sup> Iwano Masako, Schalkoff Robert, Ankei Yuji, 英語版電子書籍（おきなわ文庫、2015年）<https://ebookstore.sony.jp/item/LT000038240000466897>
- <sup>5</sup> 山口県立大学国際文化学部として編集・発行したテキストには次のようなものがある。  
『キャンパスを飛び出そう——フィールドワークの海に漕ぎ出すあなたへ』（みずのわ出版、平成24年）、『Creative Note——文化をデザインする』（東洋図書出版、平成24年）、『星座としての国際学——みつけて、つなぐ、学びのスタイル』（青山社、平成25年）、『知の空をはばたこう——国際文化をまなぶあなたへ』（東洋図書出版、平成26年）、他。
- <sup>6</sup> 安溪遊地、安溪貴子 『大学生とマチに出よう——地域共生授業をつくる』（みずのわ出版、平成22年）
- <sup>7</sup> 『平成24年度～28年度文部科学省事業「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」最終報告書』（山口県立大学、平成29年）